

「家族のエネルギー源」

原田 敬太

僕は十一才になり、もう少ししたら大人の仲間入りだ。自分の事だけでなく周りの事も考え、行動しなければならないと母は言うし、僕も思う。だけど僕は、沢山の事を考えるのは苦手だ。頭がいっぱいになる。今ある一つの問題をクリアしなければ、なかなか次へは進めない、自分中心の世界にいる。

今年の夏、父の親戚十一人で旅行へ行った。祖父、祖母、車椅子の従妹がいて、年齢層もバラバラだ。僕は、六年ぶりの皆との旅行を楽しんだ。楽しかったのは、僕らだけだったのかもしれない。

僕は母の動きに気づく事が出来ていなかった。車椅子対応のトイレ、バリアフリー化した場所や席の確保、母はとにかく動いたし、考えて皆に丁寧に伝えた。皆それに理解を示してくれた。母の優しさが伝わる。

だから僕は汗をふく母に「何が飲みたい。」と聞いた。僕の声かけに母は、ホッとした様子で「ジュースがほしい。」と笑顔で甘えてきた。僕は嬉しかった。母の気持ちに気付けた事にも、甘えてくれた事にも。その時僕は母にとって自分が、エネルギー源だと気付いた。

自分中心の世界から飛び出して、家族の中心となり、支えてあげる事が、僕の出来る家族としての役割だと思う。一人で考えるのは今の僕には難しい。でも、家族という仲間に相談したり、向き合う強さが持てた時、家族のエネルギーは、夏の暑さに負けないくらい強いエネルギーになると僕は思う。